

## オランウータンを救えずに 人類は救えるのか？



宮崎 林司

みやざき・りんじ  
[ビーボコーポレーション社長]

私とボルネオにあるオランウータンのリハビリセンターとの出会いは一九九六年で、当時この施設は、街でペットとして売買されているオランウータンの子供を見たインタナショナルハイスクールの子供たちの発案で、孤児のオランウータンを訓練して森に帰してあげるための施設でした。

運営費は子供の父兄や先生方が寄付や会員を募集して活動をしているとの事で、運営費の確保が大変だという話を伺いました。

そして、「ぐったりした元気のないオランウータンは肝炎で、人間にうつされたんだ」と

か、「オランウータンと人間のDNAは二%しか違わないんですよ」という話を聞いた時、知らないことばかりで驚きました。

その現場でわたしたち人間はオランウータンたちを窮地に追いやっていただけでなく、熱帯雨林の自然環境を壊し、地球を瀕死の状態にして、人類自身の未来をも壊しているということに気づかされました。最初の訪問以来十三年にわたり支援を続けてきましたが、現在、大きな転換期を迎えています。

オランウータンは「森の人」「森の哲人」とも呼ばれていて、とてもおとなしく賢い動物です。森を歩き回りながら、食べた果物の種を撒き散らして、熱帯雨林の保護、育成と安定に貢献しているのです。生きていくことそのものが自然を守っているのです。自然を壊し、利用して結果的に自分たちの生存環境を劣化させ、次世代の生存の危機を招いている人間よりも思慮深い生き方です。

国連の発表でも絶滅まであと一分と、本当に「絶滅の危機を迎えているオランウータン」は、いまや住める森がどんどん無くなって厳しい環境にあります。

オランウータンの危機は明日の人類の危機だと感じています。

考えてみれば、人類が減びない保証はどこにもありません。人類が一番近い霊長類「オランウータン」の生存の危機を救えないで、生物多様性の維持ができるのでしょうか？

十一月のはじめにインドネシア・パリックババン市の郊外サンボジャ地区にあるオランウータンのリハビリ施設でNHKの取材を受けました。その際にインドネシアのオランウータン保護財団(BOS)の理事長ブンガランサラギ氏(元農業大臣)と面談をさせていただきました。

その席で「二〇一五年までに檻の中のオランウータンの保護・訓練は止めて、自然の森で

保護することが政府の方針として出されました。その対策として、オランウータンを放してあげる天然の森が必要で、林業省より今後百年間の保護林区の許可をとりました。その保護林区を確保するためには政府に利用料金を支払う必要があります。そのための資金の協力を是非日本にお願しいたいのです。

オランウータンはインドネシアにしかない地球の大切な財産だから、守って行くためには是非、日本人の皆さんにも協力をして頂きたい」と訴えられました。

日本の高度経済成長の陰で消え行くインドネシアの熱帯雨林とオランウータン。日本人の良心に訴えて、トラスト資金を集める活動を始めます。百年後までも子供たちの豊かな自然を残すためにも多くの皆様のご協力をお願いします。

(NPO)ボルネオ オランウータン サバイバル ファンデーション 日本 <http://www.dos-japan.jp>